タングステン合成高感度測定
名大が専用装置開発

ホタルなどの生物が光を発生し、発射波長光を利用して、細胞内遺伝子情報に基づくタンパク質合成（遺伝子発現）を高感度に測定する装置の開発に名古屋大学薬学部の田中教授らの研究グループが成功した。浜松ホタル研究所の研究グループも、同様の装置開発に取り組んでいる。

この装置は、高感度で細胞内の遺伝子発現を測定できるもので、その感度は従来の装置に比べて10倍以上に向上している。さらに、使用する光の波長は、細胞内の遺伝子発現を観察するのに適した波長帯を含んでいる。

この装置は、生命科学分野において、遺伝子発現の解析に極めて有効である。特に、生物の生物学的な変異を検出するうえで、極めて有用であると考えられている。

この成果は、生命科学分野の研究者にとって、新しい工具として、期待されている。今後、この装置が更に改良され、より多くの研究で使用されることが予想されている。